ここが違う！浄土真宗のお盆

お盆の季節がやってきました。地域によって七月と八月の違いはありますが、浄土真宗に限らず、全国的に営まれる仏事として一般に広く定着しています。特に八月は「お盆休み」となることから、帰省ラッシュやお墓参りなど、各地の光景がテレビに映し出され、多くの人がそれぞれの「お盆」を迎えていることがうかがわれます。その反面、本来の仏教行事としての意味合いはというと、どうも希薄になっているようです。そこで「ここが違う！　浄土真宗のお盆」と題して、み教えに基づいた「お盆」の意義を考えてみました。

先祖の送迎は不要　お盆を縁に仏法を

各家庭への「お盆参り」が行われる地方では、お盆休みともなると、僧侶は多忙を極めます。「お参りは十五日までに」と要望される家庭が多く、一日に数十件を回ることもあるといいます。

これは、お盆の法要「盂蘭盆会」が十五日であることもさることながら、「十三日にご先祖が戻ってきて十六日にあの世へ帰る。その間に供養を」という霊魂観、民間信仰の影響によるものでしょう。読経を終えた僧侶に「ご先祖も喜びます」「これで安心しました」などというのは、その証左といえます。

しかし、本当にこれでよいのでしょうか。ご先祖は喜ぶでしょうか。一年に数日だけ先祖を迎え、供養し、送り出し、そして、安心する。これでは単なる自己満足ではないでしょうか。

仏教は、人間が「迷い」の存在であり、それを転じて「さとり」へ至る道を説くものです。今、この世を生きている私たち自身が現に迷っているのです。

その私自身もやがて、そして確実に「先祖」と呼ばれる身となります。しかし、自分の死に臨んだとき、果たして「八月十三日にこの世に戻ってくるぞ」と言えるでしょうか。自分自身のことさえ明らかにできないのに、すでに亡くなった人の送り迎えや、まして供養などということはできるものではありません。

すなわち、先祖のことを考えるならば、まず私自身の「迷い」が解決されなければならないのです。浄土真宗のみ教えは「十方衆生（いきるものすべて）をお念仏一つで必ず救う」という阿弥陀如来の願いを依りどころとしています。その願いによって、私自身が救われていくことこそ「迷い」を解決する道なのです。この阿弥陀如来のご恩に感謝し、そのお徳を讃えるのが、浄土真宗の仏事であり、お盆なのです。

亡き人を追慕し、そのご恩を偲ぶことは、尊い心といえます。先祖を偲んで行う精霊流しや大文字の送り火などは、情緒や風情のある習俗でしょう。そんな素朴な心情や信仰が、いつの間にか浄土真宗の家庭にも入り込んでいるようですが、先祖を追慕することだけに終わるならば、浄土真宗のお盆の意義はないといえます。

「先祖を迎え供養する日」ではなく、「この私が仏法に出遇い救われていくご縁」といただいていく。そこが浄土真宗のお盆の大きな「違い」（特色）なのです。

お供物は仏さまに　法要に準じた荘厳を

お盆で気にかかるのが、お仏壇のお飾りです。「何をお供えしたら…」と悩まれる人もあるでしょうが、特別なことは何も必要ありません。法事に準じて、お供物は餅、菓子、果物などを供え、前卓には打敷をかけられればよいでしょう。

このように「お盆独特のお飾りがあるのではない」というのが、浄土真宗の特色と言えるでしょう。

ここで「お盆独特」と言いますのは、一般によく見かける精霊棚や、それに供える足の付いたキュウリやナス、精進料理のお膳などのほか、迎え火や送り火、提灯などのことです。

これらは、いずれも先祖の霊を迎え供養するためのものですから、浄土真宗にはふさわしくありません。「故人が好きで…」と、お酒やタバコを供えたりするのも、生前を偲んでのことと思いますが、お供物とするのは避けるべきです。

お盆に限らず、お供物は仏前にお供えするのであって、決して先祖に捧げるものではありません。「それでは先祖を偲ぶと言いながら、少し冷たいのでは…」といった声が聞こえてきそうですが、そうした疑問はお仏壇と先祖が混同されているからです。

お仏壇は、先祖ではなく、人生の依りどころである阿弥陀如来をご本尊として安置するところであり、信仰生活の上で最も大切なところです。その阿弥陀さまによって、この私が救われるのであり、今は亡き先祖を救われたのも、他ならぬ阿弥陀さまなのです。

社会にあっても、何か人から恩を受けた時、その人に対してお礼を述べるのであって、他の人に頭を下げても単なる筋違いとなります。信仰生活においても、一体どちらを向いて手を合わせているのかということは根本問題です。

亡き先祖を追悼することを通して、はからずもお仏壇に手を合わせるご縁に恵まれたならば、先祖が今生の命にかえて伝え残してくれたのが阿弥陀さまのお救いの法であり、浄土真宗のみ教えであったと味わいたいものです。

先祖を偲ぶことを通して阿弥陀さまのみ教えに出遇い、このいのちの救われた喜びから再び先祖のご恩を思う――。その大切な機縁が浄土真宗のお盆です。

由来は『盂蘭盆経』に

お盆は、『仏説盂蘭盆経』に由来します。

あるとき、神通第一といわれる仏弟子・目連尊者が、亡き母を想い神通力をはたらかせると、餓鬼道に墜ち飢えに苦しむ母の姿がありました。何とか助けようと食物を差し出しますが、口に入れようとするとたちまち炎と化し、逆に母を苦しめてしまいます。

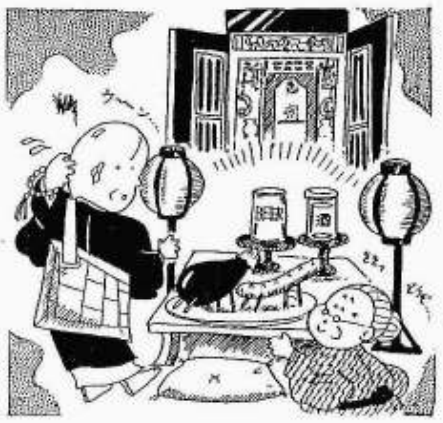
そこでお釈迦さまに教えを請うと、「七月十五日、夏の修行期間を終える僧侶たちに飲食物の供養をしなさい」と説かれ、これを実行した目連尊者は、母を救い出すことができました。

そして、このお経の結びには「毎年七月十五日、父母から七代前までの先祖を思い、仏および僧を供養して、父母のご恩に報いなさい」と記されてあります。

なるほど、お盆の由来をみると「先祖を供養する日」とも思われます。しかし、ここで注意しなければならないのは、目連の母を救ったのは、修行僧への供養だったことです。先祖七代の恩に報いる道も、仏と僧への供養を説いています。

すなわち、「先祖のご恩に報いたいなら、何よりも仏法を大切にしなさい」というのが、この経説でありましょう。先祖を追慕する素朴な心情を、何とか真実の仏教信仰へと転じさせたい――そんな仏さまの親心が偲ばれる経典です。

お盆を迎え、今一度、私自身の姿を振り返りたいものです。迷っているのは「ご先祖」ではなく、この「私」自身なのですから。



カット・武部はつ子